

第8回 長野市活力ある学校づくり検討委員会 議事録（要旨）

【開催日時】

日 時 平成29年8月30日(木)9時30分～12時

場 所 長野市役所 第一庁舎 5階庁議室

【出席者】

(委員)

山沢委員長、井ノ浦委員、風間委員、小林委員、志川委員、高橋委員、田川委員、西脇委員、藤澤委員、松岡委員、丸山委員

(長野市)

近藤教育長、松本教育次長、熊谷教育次長、樋口教育次長副任兼総務課長、上石学校教育課長、倉島主幹兼小中高連携推進室長、新津主任指導主事、唐木主任指導主事、小川係長、近藤主査、中村指導主事、寫田指導主事、千野指導主事、島田指導主事、山岸指導主事、田中指導主事、関指導主事、深澤指導主事、藤森指導主事

【会議次第】

1 開 会

2 あいさつ（教育長）

3 協議事項

(1) 講演

演題:「学びの場の多様性と教育組織運営」

講師:東京学芸大学副学長 佐々木 幸寿 氏

(2) 質疑応答

(3) 意見交換

4 その他

5 閉 会

【講演資料】

「学びの場の多様性と教育組織運営」

【発言要旨】

(委員長)

- 本日は、初めに東京学芸大学の佐々木副学長から「学びの場の多様性と教育組織運営」と題したご講演をいただく。先生は、学校法学、教育行政学の専門家であり、日本学校教育学会会長を務められている。詳しいプロフィールは事務局からお願いする。

(事務局)

- 講師紹介

《講演》

演題：学びの場の多様性と教育組織運営

講師：東京学芸大学副学長 佐々木幸寿氏

《質疑応答》

※質疑応答終了後に講師退席

《意見交換》

(委員長)

- 会議を再会する。子どもの発育段階に応じた学びというのを五ヶ瀬町でやっている。資料には集団での学びがあり、東成瀬村の学校が統合したら隣の村と協力すればいいという考えもあり、いろいろな考えがある。都市部と山間部が広く分布している長野市にそのまま簡単にあてはまらないと思うが、講演をお聴きし、感ずるところがあればお願いしたい。

(委員)

- 学力の保障で3つの時期に分けることは賛成だが、現実には小・中2つに分かれてしまうので、小学校5、6年と中学校1年の間には大きな溝がある。
- 1つの学区の中での小・中連携、地域の中での小・中連携、中学校区域の中での小・中連携と3つのパターンがある。いずれにしても、どのように連携するかを考える時間、同じ学校にいれば先生方は一緒に考えられるが、現実には小学校・中学校と違う職場にいるので、どうやって教員同士が打合せをするか、例えば日時を設定しても、先生方に見ればまた仕事が増えるのではないかと思う。どこを削るかを教育委員会と一緒に考え、時間を確保してあげないと、理想は理想だが現実にはできないのではないかと思った。

(委員)

- 2つのことを考えた。1つはどの事例を見ても、子どもたちの年齢・発達段階ということもあるかと思うが、子どもたちが健全に成長していくためには集団での学びが必要であると感じた。集団をどう保障してやれるか、例えばICTなのか、五ヶ瀬町のように集まるという手段なのか、統廃合なのか、手立てはそれぞれあるだろうが、集団で学ぶという機会を奪ってはいけないと改めて感じた。
- もう1つは、長野市という大きな自治体で多様性のある学校のあり方考える時に、現状の中学校区がいいかどうかは分からないが、子どもたちが小・中学校と9年間育っていくそのままとまり、中学校区とその外側とのつながりを考えつつ、二戸市の学区経営という考え方、これを学校が自立的にそれぞれの学区ごとに、この学区は今後どのような学校のあり方をしていけばいいのか、考えていく場が必要なのかなと感じた。

(委員長)

- ただ今のは、二戸市の学区単位で学校運営を教育委員会でやっている点だと思う。長野市は色々な学校区というか学校群があるので、逆にいろいろなことができると思う必要があると思う。

(委員)

- 住民自治協議会という視点でお聴きした。学校だけでなく、老人福祉、まちづくり等総合的な視点からのお話があり、自分の地域でもこのようにまとめれば、学校だけでなくまちに活気生まれるのではないかと希望が湧いた。ただ、大きな長野市の中でどれだけ地域の考えが実現できるか考えると心配な点もある。

(委員長)

- どこまで各地域に自由度を与えるかということが重要で、よくできた政策があればその地域に任せられるのではないかと個人的には考える。いくつかのモデルを出して、その中から自分の地域にあったモデルを選び、さらに地域に合う形に変えて運用していくことが理想だと思う。そうすると地域がばらばらになってしまうということもあるが、そこはしっかりと、学校群同士の連携や都市部と山間地がつながった連携など、しっかりと連携をさせる必要はあると思う。

(委員)

- 今日で8回目の検討委員会になるが、私自身の課題は何なのかいつも迷っていた。出される資料に対して自分がどう理解するかが最初で、その条件でこの学校、あの学校と見てきたが、長野市のように大規模で様々な条件がある中で、学校をどうしたらよいか考えることを先生自身も言われていたかと思う。
- 学校が立地している条件、先生方の体制、組織運営の問題など、それらをいかにして子どものために活かすかということは、最初に形があるのではなく、地域から形作ることがまず大事であると感じた。
- 親は先生に目が向いている、地域は学校に目が向いている、地域の目はこの子どもはどうなんだとどうしても第三者として見てしまう、その中で今日教えていただいたのは、まず学校の先生方、地域の私たち、地域の中でのPTA、それぞれの立場で今置かれている学校の課題は何なのか、自分たちができることは何なのか、私たちが望む学校はどういうものなのか、そのようなことをやるべきだと学ばせていただいた。
- 私は地域という部分で関わっているが、学校の通学路の問題、施設の問題など、子どもの校外での活動を見て親にこうしろというのではなく、区長も含め地域で話し合うところまで来た。そこには学校と直接話し合う場と、学校と一定の方向を持ちながら一緒に話し合う場がいくつかあると思う。このような組立てをしていかないと、先生のお話が活かされないと思う。

(委員長)

- 今後は中間とりまとめも意識しながら、更に議論を深めていく必要がある。次回は今までの意見を整理して資料を出していただきたい。
- 様々なタイプの学校群のイメージを考えた場合に、あるいは発達段階に応じた学びのシステムを考えた場合にも、学校・学級の規模をどうするかを考えることは非常に基本的な考え方になってくる。集団教育なので、人数が少なければ少ないほどいいというわけではない。学校教育はこれだけではない。鬼無里で学校を見させていただいたが、先生1人に子どもが3人しかいない状況で365日勉強している。様々なことを学ぶという観点からすると、それはどうなのかなと感じる。現実としてこのような状況もあるわけだが、理想的な学校の規模というものを議論しなければいけない時期に来ていると思う。次回は今までの審議のまとめと、学校・学級規模の議論ができるようなデータのある資料を作っていただきたい。

以上